

エルサルバドルの 芸術と大聖堂

—— 何に価値をおくのか？ ——

村野 正景 京都文化博物館学芸員

宗教、政治、そしてアート。それぞれの価値観が錯綜する模様を、エルサルバドルの国民の精神的よりどころであるメトロポリタン大聖堂の変遷からみていく。



アートと社会開発を 結びつけた芸術家

エルサルバドルの観光地や空港でよく見かけるユニークなアートがある。国民的芸術家



ジョルトが工房を開いた芸術の町 ラ・バルマ 壁も柱もジョルト風 (2007年)

フェルナンド・ジョルトの作品だ。さながら葛飾北斎の浮世絵が日本のイメージとして各所で利用されるように、この国の姿を表現した彼の（または彼に影響を受けた）意匠は至るところでお目にかかる。二〇一三年に国民文化賞を受賞したとき、作品が高く評価されることも、「地図にあらたな点を書き加えた」と長年の功績を讃えられた。彼の芸術は、何もなかったところに工芸品産業を創出し、アートの町を生み出したのだ。

大聖堂に現代アートを導入 こうした高い評価は、宗教界にも届く。同国のカトリック教会の中心たるメトロポリタン大聖堂のファサード制作に彼が登用されたのだ。首都サンサルバドルの歴史ある建造物を、現代アートが飾ることになったのである。

この国は、他の中米諸国と同様、一六世紀にスペインの植民地となる。そして一九世紀の独立を契機に大聖堂は建造された。しかし地震による倒壊や焼失等の被害に遭い、一九五〇年代には貧困層支援に資金を回したこともあって再建は遅れた。このときの大司教はオスカル・ロメロ。黒人解放運動で著名なキング牧師らと並び、英国のウエストミンスター寺院に掲げられる「二〇世紀の一人の殉教者」の一人である。後に地下礼拝堂に「聖」ロメロの遺体が埋葬され大聖堂のシンボルとなる。この由緒ある大聖堂のファサード制作にあたり、ジョルトは西洋的キリスト教的意匠だけ

ではなく、先住民の文化的意匠を取り入れ、ロメロが護ろうとした普通の人びとを描き、約三〇〇枚の陶板にこの国の姿を表現しようとした。また教会は、資金不足を補うため基金を

作り、広く信者等に陶板一枚一枚の所有者になるよう寄付を呼びかけた。こうして一九九九年、大聖堂は落成し、ジョルト生涯の大作は完成した。その後文化庁は、大聖堂を含むエリアを二〇〇八年に歴史保護地区に指定し、さらに大聖堂の歴史性や芸術性を評価し、単独で有形文化財として登録しようとした。



英国の聖ジョージ大聖堂のロメロ・クロス (2016年)

宗教の混合した行為が見られるなどの特徴をもつ。その意味で、白のデザインは原理主義的ですが、ジョルトのデザインこそエルサルバドル的だった。今、白の大聖堂は、芸術家や彼を支持する多くの人びとの、そんな眼差しを受けている。言い換えれば、一見、没個性となった大聖堂は複雑な価値意識を喚起させる文化遺産となったのだ。

右：大聖堂のファサード（部分）。民家や人びとが描かれる (撮影・白井卓、2007年)
左：すべてが白になった大聖堂 (撮影・Henry Sermeño、2016年)



錯綜する価値観

しかし事件は起きた。二〇〇九年から大司教の座に就いたエスコバル・アラスの命により、二〇一一年末、ファサードの陶板が剥がされ、全面が白く塗り直された。教会は当初、陶板の劣化の問題を挙げ、また文化遺産保護の指定範囲に陶板が含まれると知らなかったと述べた。しかし後に、文化庁の指定を押し付けと感じており「教会（聖）と政府（俗）は別」であること、そしてなんとデザインが世俗的で大聖堂にふさわしく

ないと主張するに至った。元文化庁長官は「すべてのアートは聖俗かかわりなく文化遺産で保護対象だ」と反論したが、この事件は「法治国家として本心に機能する保護の仕組みは何か？」「この国における宗教芸術のあり方とは？」といった議論の発端となった。

二〇一六年八月、「文化法 (Ley de Cultura)」が議員の満場一致で可決された。高等芸術養成所の設立、文化芸術活動支援の資金確保、先住民文化の保護など、あらゆる文化芸術が保護・振興されるべきと明記された。宗教と政治、宗教とアートの関係において錯綜した価値観をもつこの国で、今後この法がどんな力をもつのだろうか。白くなった大聖堂は再び変わるのか。ロメロ・クロスはさらに普及するのか。今後この国が何に価値をおくのか目が離せない。